

# ハイデガーと保守革命

——〈有限性の哲学〉あるいは〈哲学の外部〉——

稲田 知己\*

## Heidegger and the Conservative Revolution

—“Philosophy of Finitude” or “Outside of Philosophy”—

INADA Tomomi

Heidegger, who was deeply aware of the finite conditions of human knowledge, tried to envisage a “philosophy of finitude”. Therefore his philosophy was always exposed to “outside of philosophy”. The purpose of this treatise is to depict the characteristics of his philosophical ideas in new historical perspectives in the context of the philologist Hellmuth, the legal scholar Schmitt, and the writer Jünger. As a result, Heidegger’s thinking turns out to be an original and radical theory of the Conservative Revolution.

*Key Words:* Conservative Revolution, Finitude of Being, End, Beginning, New Historical Approach

### はじめに 保守革命の流れのなかのハイデガー

マルティン・ハイデガー(1889-1976)くらい、「哲学の有限性(Endlichkeit)」(GA73.1, 584)、すなわち哲学的思索が歴史的に制約されていることにたいして、一貫して自覚的であった思想家はいなかった。前期の主著『存在と時間』(1927)執筆中の彼は、師フッサールの超越論的現象学を批判し、「現象学の主題領野として純粹意識を取り出すということは、現象学的に事柄そのものへの還帰において獲得されているのではなくて、哲学の伝統的な理念に後退することによって獲得されている」(GA20, 147)とのべている。ハイデガーからすれば、主観性としての純粹意識によって「絶対的な学の理念」(GA20, 147)が実現しているわけではなく、それはたんに〈近代〉の哲学的伝統を無批判に受け入れているにすぎない。のちの言い方では、「〈諸体系〉の時代は過ぎてしまった」(GA65, 5)のだった。

このように**哲学の有限性**に思いをひそめた哲学者は、**有限性の哲学**を構想しようとした。周知のように、〈死へとかわる存在〉としての現存在に着目する『存在と時間』の中心テーゼは、「時間性は本質的に脱自的である。時間性は根源的に将来から時熟する。根源的な時間は有限である」(GA2, 438)であった。この脱自的時間性

の形成する諸地平から存在一般が理解されるかぎり、「存在了解は有限なものの中で最も有限なものである」(GA3, 229)のであって、「存在それ自身が本質において有限である」(GA9, 120)。やがて、後期の主著『哲学への寄与論稿』(1936-38)のクライマックスにおいても「原存在(Seyn)の最も内的な有限性」(GA65, 410)が告げられ、講演「時間と存在」(1962)においても「性起(Ereignis)の、存在の、四方界(Geviert)の有限性」(GA14, 64)が論じられた。ついに最晩年の草稿でも「空け開け(Lichtung)の有限性」(GA73.2, 1482)という文言が記されており、ハイデガーの思索は、まさに有限性で閉じられる<sup>1)</sup>。

もしハイデガー哲学の全道程が有限性に収斂するとしたら、彼の構想した〈有限性の哲学〉は、つねに〈哲学の外部〉にさらされていたことになろう。この〈外部〉は、哲学外の領域、さしあたり文学や政治に反映された、時代状況とみなすことができよう。本論文は、戦間期のドイツ特有の社会思潮として、「内的な多元性にもかかわらず統一性を形成していた」<sup>2)</sup>運動として、その支持者も敵対者も使っていた「同時代の標識」<sup>3)</sup>として、**保守革命(Konservative Revolution)**に注目する。そして本論文の目的は、ハイデガーの思索を、きわめて独創的な、最もラディカルな保守革命論としてあきらかにすることである。

そのさい、解釈上の難点は、やはりナチズムとの関係であり、ナチズムがあまりに極悪非道だったため、もは

原稿受付 令和3年9月14日

\*津山工業高等専門学校名誉教授

や保守革命という異彩を放った歴史事象を現代人が追体験しかねるところにある。じつは〈保守革命〉は広い概念であって、それを構成するいくつかの潮流のなかにはナチズムと接点をもつものもあったが、とはいえナチズムと断じておなじではない。たとえば、それを1921年という早い時期に提唱した作家に、トーマス・マンがいた<sup>4)</sup>。またホーフマンスタールは、1927年1月10日ミュンヘン大学大講堂でおこなった講演で、「われわれがルネサンスと宗教改革という二つの局面で呼びならわしている、あの16世紀の精神的変革にたいする内的反対運動」として、かつ「国民全体が参加しうるような新しいドイツの現実」として、「ヨーロッパの歴史が見たことがないくらいの規模における保守革命」を宣揚した<sup>5)</sup>。大方の見方では、こうした〈反〉近代の流れのなかにはハイデガーも棹さしていたとみなされるだろう。

本論考で主として取り上げるのは、ハイデガーと同じく第一次世界大戦に従軍せざるをえなかった〈1914年の世代〉に属す、保守革命と深くかかわった群像である。すなわち、文献学者ノルベルト・フォン・ヘリングラート(1888-1916)、国法学者カール・シュミット(1888-1985)、作家エルンスト・ユンガー(1895-1998)。こうした多彩な顔ぶれをあつかうために本論文は、**新歴史主義**という研究方法を採用する。ふつう新歴史主義といえ、批評理論の分野で使われる用語である。それは、新批評のテキスト内在主義にも、ポスト構造主義のポストイストワール風のテキスト消費にも反対するだろう。むしろ新歴史主義にとっては、「テキストの歴史性と歴史のテキスト性とにたいする相互関心」<sup>6)</sup>が肝要であって、どんな偉大な哲学的テキストであれ、時代という巨大な物語テキストとの交渉において読解されるのでなければならぬ。保守革命の脈絡のなかでハイデガーを読もうとする本論考は、新歴史主義の代表者グリーンブラットの言葉をかりるなら、「共鳴のなかの核心に驚嘆すべきものを蘇生させること」<sup>7)</sup>をめざす。

## 1. 〈死のさなかへの被投性〉

### あるいはヘリングラート

1910年、フライブルク大学神学部から哲学部へ転部する直前のハイデガーは、カトリック系の月刊誌『アカデミカー』に、「死をとおして生へ(ヨルゲンセンの『生の虚偽と生の真実』についての思想)」という小論を寄稿した。そこに、若きハイデガーの哲学的理想が吐露されているのだが、「より高き生は、より低き形態の没落によって起こる。……もしおまえが精神的に生き、おまえの浄福を戦いとりたいなら、死して、低劣なもの押し殺し、超自然的な恩寵とともにたたらけ。されば、おまえは蘇るだろう。そしてそのようにして今や安らぐ人こそ、十字架の影をおいながら、意志強固な、希望に輝く詩人哲学者、つまり現代のアウグスティヌス」<sup>8)</sup>。こ

のような死から生への回心的復活、非本来性から本来性への実存の変貌という身ぶり、これがハイデガーの哲学的端緒である。のちにフッサール現象学を学んだ彼は、1921年夏学期講義「アウグスティヌスと新プラトン主義」において、「本来の実存」(GA60, 195)に着目するとともに、実存論的な諸構造としての「実存範疇」(GA60, 232)を探索していくことになる。アリストテレス解釈によりながら現象学的存在論を構築しようとするハイデガーが、もうそこにいる。

だがそれにしても、こんにちほとんど忘却されているデンマーク人作家ヨルゲンセンを推奨するハイデガーには驚かされる。文学青年といいいだろう。彼は1923年にマールブルクに着任するが、その独特の風貌を三木清は的確に伝えている。三木は下宿先からほど近いハイデガー宅を訪問したさい、「ドイツ文学の古典の全集がぎっしり並んでいた」本棚を、「いささか奇異の感をもって眺めた」<sup>9)</sup>と。

当時の社会思潮としての保守革命には、いくつかのグループがあったが、そのなかには北方人種を至上視する運動があった。現象学のお膝元のフライブルクは、意外にも、その震源地とってよかった<sup>10)</sup>。フッサール門下にもルートヴィヒ・フェルディナント・クラウスがいた。フッサールの『イデー』第2巻を人種理論に応用し、「天才的で、最も重要な、この時代のドイツ人種学者」<sup>11)</sup>と評される人物である。その著書『人種と魂』にたいして、ハイデガーは1927年3月17日付の弟子レーヴィット宛書簡で、「クラウスの恥知らずには沈黙でこたえることができます。こんな書籍をあまり真に受けてはいけません」<sup>12)</sup>とさとしてい。それでもユダヤ系のレーヴィットは同書の書評をものしたのだが……<sup>13)</sup>。

保守革命の潮流のなかで、ハイデガーにとって看過しえないのがゲオルゲ派である。詩人ゲオルゲを指導者とするエリート集団だが、そこにはさまざまな人物がつどった。生の哲学者にして反ユダヤ主義者のクラウグスや、第二次世界大戦末期にヒトラー暗殺計画の首謀者となったクラウス・フォン・シュタウフェンベルク伯爵など。ハイデガーとの個人的なつながりという観点でいえば、母方に東ローマ皇帝の血を引くヘリングラートが最重要であって、彼はヘリングラートの自筆稿を遺品として譲り受け、それを愛蔵していた。また同派の代表的な文学者、グンドルフ(1880-1931)とコメレル(1902-1944)とは面談したことがある<sup>14)</sup>。交流の中心には詩人ヘルダーリンがいた。

ヘリングラートがシュトゥットガルト図書館でヘルダーリンの後期讃歌とピンダロス翻訳の草稿を発見したのは、起草されて1世紀余を経た1909年のことだった。その翌年、ヘルダーリンのピンダロス翻訳がゲオルゲ主宰の詩誌『芸術草紙』で紹介され、後期讃歌の傑作「あたかも祭りの日のように……」がゲオルゲ派の編集

による詞華集のなかで史上はじめて公表された。これまでほとんど忘却されていた詩人がドイツの最も偉大な詩人としてあらためて認知され、当時のドイツ教養市民層に決定的な影響をあたえていくことになった。ハイデガーの証言するところでは、「この二つ〔ヘルダーリンのピンダロス翻訳と後期讃歌群〕は、当時、われわれ学生に地震のように働きかけた」(GA12, 172)のだった。

その影響の跡をハイデガー自身の証言によってたどっていこう。1911/12年冬学期、ヘリングラートの学位論文『ヘルダーリンによるピンダロス翻訳』を知った彼は、それを大学図書館から借り、1913/14冬学期、リッケルトのゼミナールで、ヘリングラートがゲオルゲ派とつながりがあって、新ヘルダーリン全集の出版準備をしていることを聞く<sup>15)</sup>。1918年8月30日、「ヘルダーリンは目下のところ僕にとって一つの新しい体験だ」<sup>16)</sup>。1925年4月12日、「僕は多くの時をヘルダーリンとともに生きている」と恋人に伝え、同年8月23日と9月14日、ヘルダーリンの『ヒュペリオン』を読み、やっとわかりはじめたと報せる<sup>17)</sup>。ここで『存在と時間』との関連にふれると、1936年の回想によれば、「論文『存在と時間』は1927年に出版された(1925年と26年に書き記された)」(GA82, 142)。同書は20世紀最大の哲学書といわれるけれども、わずか2年ほどで脱稿されたらしい。もちろん、それ以前に書きためた論文や講演草稿や講義ノートを参照しながらの執筆作業だったはずだ。その最中でさえ、ハイデガーはヘルダーリンとともに生きていた。じっさいハイデガーがヘリングラート版ヘルダーリン全集の第2版から引用するのは1932年夏学期講義からだ( GA35, 103)、三木の見たマールブルクの書齋には、おそらく同全集全6巻が鎮座していたのではないだろうか。その第2版の刊行は1922年と23年のことだった。

『存在と時間』形成史上、その最古層とみなされるのは第2編第5章「時間性と歴史性」であり、その第77節は論文「時間という概念」(1924)からの再録の跡が歴然としている(GA64, 3-15)。この関連で注目すべき一節がある。「この命運ということで、われわれは共同体の、民族の生起を指している。……自分の〈世代〉のなかでの、またこの〈世代〉とともにする現存在の宿命的な命運が、現存在の十全な本来的生起を構成する。……本質的に自分の存在において将来的であり、そのため自分の死に向かって自由に開かれ、死に当たって砕けながら、自分の事実的な現へ投げ返されうる存在者だけが、いいかえれば、将来的なものとして等根源的に既在しつつ在る存在者だけが、遺産として得た可能性を自己自身に引き渡ししながら、自己固有の被投性を引き受け、そして〈自分の時代〉に向かって瞬間的であることができる。……既在した何らかの実存可能性を本来的に反復すること——現存在が自分の英雄を選ぶということ——は、実存論的には先駆的決意性にもとづく」(GA2, 508f.)。哲学者

の硬質な文体ながら熱く語られているのは、これが、ヘルダーリンという〈遺産〉を〈民族〉に伝える途上で死ぬほかなかった、ハイデガーと同じ〈世代〉に属す、あのヘリングラートへの鎮魂歌だからではないか。「文字を愛した、つまり、もっぱら命運を愛したがゆえに文献学者たりえたノルベルト・フォン・ヘリングラート」(GA75, 161)を、ハイデガーは「自分の英雄」として選んだのではないか。

たしかに『存在と時間』には本来的かつ共同存在的な立脚点から書かれた部分があって、そこで重要になるのが〈世代〉概念である。「世代は個人に先行する」(GA80.1, 153)のであり、「現存在は……つねに世代である」(GA64, 88)。ハイデガーはこれについて説明をあまりくわえていない。けれども、「死のさなかへの(in)被投性」(GA2, 334, 340, 409)を宿命づけられた世代にとっては、被投性という実存論的契機が指し示す歴史的現実の苛酷さはわかりきっていた。ヘリングラートが第一次世界大戦で戦死したのは、1916年12月14日のことだった。みずからの編纂するヘルダーリン全集を上梓している途上だった。後期ヘルダーリンの詩篇を収めた第4巻を生前に手に取ることはできなかったものの、その序文でヘリングラートは高らかに宣言している。「この巻には、ヘルダーリン作品の心髄、核心、頂点、すなわち本来の遺贈品が含まれている」<sup>18)</sup>と。後期詩篇群は、精神を病んだ詩人の衰えた創作力によるものなどではなく、むしろその絶頂なものであった。この全集の理解にドイツの将来を託してハイデガーはいう。「もしかしたらいつの日かドイツの青年は、彼らが手にするヘルダーリン全集の創始者、1916年に28歳でヴェルダンの前で斃れたノルベルト・フォン・ヘリングラートを記憶にとどめるかもしれない——あるいはまたそうならないかもしれないが」(GA39, 9)。

## 2. 窮迫の様相をおびた〈裂け開け〉 あるいはシュミット

ハイデガーは1933年4月21日から34年4月27日までフライブルク大学総長職にあった。この総長ハイデガーがシュミットに宛てた、33年8月22日付書簡(GA16, 156)が一通だけ残っている。その直後に、メーリングの考証によれば、たぶん9月9日に、二人はベルリンで面会したことがあるようだ<sup>19)</sup>。交流が途絶えたことを考えれば、会談は不調に終わったのだろう。法学者にして政治学者のシュミットはもともと大統領内閣に協力し、ヒトラーの首相就任を阻止すべく動いていたが、ヒトラー政権が成立するや、手のひらを返すかのようなオポチュニストぶりだった。このとき、ゲーリングのブレーンとして、すでに枢密顧問官であり、ベルリン大学教授も約束されていた。かたや哲学者は、2度目のベルリン大学招聘の話がもちあがったものの、「自分にはどんな

ストもない」(GA16, 168)ありさまだった。シラクサにおもむいたプラトンのように、ハイデガーは「ヒトラーに近づく可能性」(GA16, 168)に賭けていたかもしれないが、しょせん幻想だった。

シュミットは反ユダヤ主義者だったが<sup>20)</sup>、保守革命家かどうかには議論がある。しかし30年代には保守革命の知識人たちと積極的にまじわり、大きな影響をあたえるようになった。ユンガーとの手紙のやりとりは30年にはじまっている。こうした時代の雰囲気やハイデガーも鋭敏にとらえていて、1929/30年冬学期講義で、「新たな中世」を説く哲学者レオポルト・ツィーグラーに言及した(GA29/30, 106)。彼は、保守革命の青年保守派を代表する論客エトガー・ユリウス・ユング——ナチ批判の科で1934年に粛清された——の盟友だった。ハイデガーはまた、ヴァイマル末期にハンス・ツェーラーの編集によって読者数が飛躍的にふえた、保守革命の有力誌『タート』の熱心な読者でもあった<sup>21)</sup>。そして、最近になって公刊された弟フリッツとの書簡によると、1931年12月18日の時点で、ハイデガーはヒトラーを「この男は非凡で確かな政治的本能をもっている」<sup>22)</sup>と評価している。

さて、ハイデガーが政治を主題的にあつかい、その関連でシュミットに論及したのは、1933/34年冬学期演習「自然、歴史、国家の概念の本質について」と、1934/35年冬学期演習「ヘーゲル『法哲学』」においてであった。まず前者は、「人間のあり方、ならびに国家(Staat)を可能にするものとしての政治的なもの」(S.74)<sup>23)</sup>をあきらかにしようとする。そのさいハイデガーは、「存在と存在者との存在論的差異」という、みずからの哲学的概念枠に準拠する。すなわち「民族(Volk)とは、その存在が国家であるところの、存在者である」(S.79)。そして「人間的存在の最高の実現は、国家において生起する」(S.88)。このような把握にもとづいて、「友—敵関係」というシュミットの「政治的なもの」の理解に、批判的な論評がくわえられている。彼の『政治的なもの概念』では、「本来的に政治的な区別は友と敵の区別である」とされ、「敵とは……実存的に他者、よそ者である」<sup>24)</sup>とされた。だから、政治の本質には敵の命まで奪って統一を実現する非情の論理が含まれるが、しかしそのようにして成立した「政治的統一が国家や民族と一致するというわけではない」(S.74)と、ハイデガーはシュミットの不備を明敏に指摘した。とはいえ、この演習の最終日には、「真なる意志の貫徹は強制をめざしているのではなく、他者のうちに同じ意欲を呼び覚ますことをめざす」(S.87)がゆえに、指導者のうちで人々がおのずと結びつく「総統国家……総統のうちでの民族の実現」(S.88)が賛美されている。この議論は、むしろ、シュミットの『現代議会主義の精神的状況』(1923)を踏襲したものといえよう。彼の理論よれば、民主主義とは「治者と被治者との、支配者と被支配者との同一性」<sup>25)</sup>であるから、大

衆の喝采があるなら、独裁でさえ民主主義といえるのだった。

だが、翌年の「ヘーゲル『法哲学』」になると、レーム粛清事件後ということもあって、ナチ国家の現実と距離がとられているように思われる。「指導者〔総統〕と信奉者——国家形成の生起としては、ただ形而上学的にのみ可能だ」(GA86, 163)と、指導者原理に疑問符が付される。また、桂冠法学者シュミットにも不躰な非難が飛ぶ。「カール・シュミットはまったく皮相的すぎる」(GA86, 74)のであり、「カール・シュミットはリベラルに思考する」(GA86, 174)。もちろんリベラルという語は、保守革命の文脈では、相手を罵倒する言葉である。彼の「友—敵—関係は、政治的なものの本質帰結の一つ」(GA86, 173, 609)にすぎない。それにたいして、ハイデガーは存在としての国家をもとめた。「民族の存在としての国家、気遣い(Sorge)の存在としてのそれ」(GA86, 82)を。この演習草稿の新しいところは、ハイデガーが政治を〈気遣い〉から把握しようとする点にある<sup>26)</sup>。気遣いとは現存在の根本構造であった。ナチスの生物学主義との関連でいえば、「現存在とは……〈生物学的に〉導き出すことはできないのであって、……ただしく把握された気遣いから」(GA86, 161)とらえられねばならない。それでは、さらに気遣いをどう考えればいいのか。ここで、ハイデガーは謎めいた文言を書き記す、「気遣い……〈有限性〉として」(GA86, 162)、「気遣い！——裂け開け(Zerklüftung)」(GA86, 162)、「民族の原存在としての国家。……原存在と裂け開け」(GA86, 115)と。このときのハイデガーは、喧騒に沸き立つ第三帝国の誕生によって、真の民族が実現したとは考えることができなかったのだろう。というのも「民族は〈神の顕現〉によって、すなわち来たるべき神の分断する近さによって、はじめて生成する」(GA86, 139)から。この「神の顕現」の語に矢印でつながれているのが、「裂け開け——根本生起——まさに死というもの」(GA86, 139)だった。この〈裂け開け〉とは何か？

この語が最初に登場したのは、論文「ヘーゲルと形而上学の問題」(1930)の「付録」においてであろう。そこで、「有限性—無限性という問題」(GA80.1, 317)が論究されたとき、後者の立場に立つヘーゲルにたいして、前者の「ハイデガーにとっての存在は、破れ、裂け開け」(GA80.1, 320; 318)をあらわすとされた。それから、1931/32年の「黒表紙のノート」[私的な思索備忘録]によると、「存在の本質、それは、不可避的なものの権能を根拠として、可能性、現実性、必然性への裂け開けとして現成する」(GA94, 41)。これら可能性・現実性・必然性は、哲学の伝統では、**様相**のカテゴリーと呼ばれた。こういうわけで、のちの『哲学への寄与論稿』で、「裂け開けと〈諸様相〉」(GA65, 279ff.)について、二節が割かれた。

このように見れば、『存在と時間』第1部第3編「時

間と存在」の問題系と、〈裂け開け〉との関連がわかる。その「時間と存在」の結論を端的にいえば、「存在とはテンポラリテートをいう」(GA83, 18f.)。テンポラリテートとは、「時間性に帰属する地平的諸図式の統一性を顧慮した時間性」(GA24, 436)であり、存在とそのさまざまな様態とは、脱自的時間性の形成する将来・過去・現在の諸地平から理解されているはずである。「時間性——テンポラリテート、そして様相との関連」(GA86, 9)、「この様相化のテンポラールな可能性」(GA22, 200)を超越論的に探求することが、前期ハイデガーの課題であった。けれども超越論的な思考様式が放棄された30年代になると、「裂け開けの開基としての被投的企投」(GA94, 85)を、ハイデガーはつぎのような図に描いている。すなわち、「世界」と「大地」、「神々」と「民族」の四者が出会う場が、拡張された意味での「現—存在」であり、その場の中央に「原存在」と「性起」と「裂け開け」が書き込まれている(GA73.1, 257)<sup>27)</sup>。

だがしかし、政治の熱いこの時期に、ひからびた様相概念をなぜ取りあげる必要があったのか。あきらかにハイデガーは、国民社会主義のイデオロギーには疑念をいだいていた。「民族はたんに社会主義的なものでも国民的なものでもなくて、原存在と真理との本質から」(GA73.1, 360)とらえられねばならない。このことと様相とが関係することがあるだろうか。じつは様相概念のうち、必然性が重要になってきた。つまり、「存在の窮迫(Not)とその裂け開け——時—空間。……必—然性〔窮迫が向けられてくること Not-wendigkeit〕——存在の最も根源的な〈様相〉」(GA73.1, 209)。前期ハイデガーは可能性・将来・企投の契機の優位を説いたが、この点は後期においても変更はない。「原存在のうちで、その最も深い裂け割れ(Klüftung)として、可能的なものが現成する。そういうわけで、まずもって原存在は、可能的なものという形態で、別の原初(Anfang)の思索のうちで考えられねばならない」(GA65, 475)。けれども、将来的に企投された可能性がたんなる可能性であることをやめて、その可能性が、既在的な被投の必然性によって担われることこそ、肝要である。「必然的なものは窮迫から由来する」(GA66, 247)のであり、その窮迫は存在から来る。「原存在が窮迫である」(GA95, 244, 251)のであって、「原存在という窮迫」(GA66, 100)に気遣うことが思索の課題となる。保守革命を主題とする本論文は、ハイデガーが革命を論じる地点、白熱の保守革命を語る地点に、ようやくたどりついた。

### 3. 保守革命としての〈存在歴史的思索〉 あるいはユンガー

ハイデガーは革命的な思想家だった。「〈保守的なもの〉は史学的なものにはまりこんで動けないでいる。革命的なものだけが歴史の深みにとどく」(GA45, 41)。そ

もそも彼の〈存在の問い〉からして、「全西洋哲学をその諸根拠から把握し変貌させること——その未展開だった問いをいっそう根源的に取り上げることによって」(GA82, 150)という、きわめてラディカルな試みだった。その彼であればこそ、同時代の保守革命派のさまざまな革命的な議論を知悉したうえで、それらに満足しはしなかった。すなわち、「すべての〈革命的なもの〉は、〈保守的なもの〉への従属的な反対者にすぎない。両者とも、従来のものや過ぎ去ったもので身を保ち、そうしたものを長々とつづく今日的なものへと調整する」(GA69, 23)。たいてい革命といえば、名誉革命やフランス革命などが思い浮かぶが、こうした複数形で語りうる「あれこれの革命はけっしてラディカルではない」(GA95, 229)。とすれば、いったい「どこから〈革命〉が」(GA84.1, 340)?

答えははっきりしている。「〈革命(Revolution)〉——その本質をわれわれはどうとうついに革命的に理解する、つまり文字どおり、本質を原初的なものへと転がして戻すこととして。ほんとうに革命的な者は新しいものをもたらすのでも、古いものを護持するのでもなく、原初的なものを呼び覚ます」(GA97, 19)。約言すれば、「通常のものの変革、すなわち革命とは、原初への真正な関与である」(GA45, 40f.)。真なる革命を語るさいのハイデガーの視座は原初だった。常識的には、原初などプリミティブなもので、一顧だにあたいしない、と思われよう。ところが彼にとっては、「将来的なものが歴史の根源である。が、最も将来的なものとは偉大な原初である」(GA45, 40)。将来的な別の原初を模索することは、古代ギリシアの最初の原初から窮迫を受けていなければならない。それゆえ「**原存在歴史的な思索は、別の原初を先行思索することとして、第一の原初を想起することである**」(GA70, 141)。そのかぎりでは後期ハイデガーの存在歴史的思索は、彼独自の保守革命論、〈原初〉にもとづくラディカルな保守革命論だったといえるだろう。

こうしたハイデガーが保守革命の群像のなかで、たがいに敬意をばらう文通をするようになったのが、作家ユンガーだった。第一次世界大戦の英雄として帰還した彼は、「民族主義的な理念」と「独裁」を切望する<sup>28)</sup>、革命的なナショナリストとなった。皇帝を崇拝するような旧来の反動的右翼ではない。「1914年のあの日々に、われわれは新ナショナリズムの出生時刻をみとめなければならぬ」<sup>29)</sup>。この「新ナショナリズムの最も緊急の課題は、労働運動の形式に習熟するようになることである」<sup>30)</sup>。けれども、彼のナショナリズムとナチズムとの相違は、最初からはっきりしていた。「反ユダヤ主義はナショナリストにとって本質的な流儀の問題設定なんかではない」<sup>31)</sup>からであり、「ナチズムにとっては当然にも大衆が役割を演じるのにたいして、ナショナリズムにとって数は意義をもたない」<sup>32)</sup>からである。あくまで「ナショナリストは内面的態度の理想をもとめる」<sup>33)</sup>のであり、それをユンガーは「英雄的リアリズムの態度」

<sup>34)</sup>と呼んだ。けっきょく彼は、ゲッベルスの勧誘にもかかわらずナチ黨員にはならなかったし、ヒトラーが政権を奪取するやいなやゲシュタポによる家宅捜索を受けて、ベルリンからゴスラーへと逃避した。

彼の長編エッセイ『労働者——支配と形態』(1932)は、1929年にナチスとの関係を清算したあと、ナショナリストとしての自分の殻を脱ぎ捨てていく途上で書かれた。「労働者という形態を目に見えるようにすること」<sup>35)</sup>をめざし、「リベラルな民主主義から労働国家への移行」<sup>36)</sup>を記述した上掲書は、刊行直後のナチ国家誕生を予言しているかのように思われる。しかし、ユンガーの鋭いまなざしはさらに遠くを見つめていた。「ナショナリズムと社会主義とは、19世紀に固有な原理として認識されねばならない」<sup>37)</sup>のであり、むしろ、「規模において国家の戦争や社会の変革を凌駕しているような革命」<sup>38)</sup>——ハイデガーはこれを「無制約的な作為性」にもとづいた「西洋的革命」(GA96, 132f.)と呼んだ——が進行中であることが看取されねばならない。それが、〈技術〉である。「技術とは、労働者という形態が世界を動員する仕方である」<sup>39)</sup>。ニーチェの永劫回帰と超人のように、ユンガーにおける技術と労働者とは呼応している。

この書の真価をハイデガーはただちにみとめ、小さなサークルで討議し(GA16, 375)、膨大な覚書をつづった。ユンガーにとって「最重要の意味において形態は存在である」<sup>40)</sup>が、そこにハイデガーは「形態というプラトン形而上学」(H90, 167)を読み取り、労働者という形態に近代的主観性の徹底化・肥大化を嗅ぎ取った。「労働者という形態のうちで人間存在の主観性が達成するのは、みずからが無制約的なものへと完成し惑星的なものへと拡大することである」(H90, 40)。「惑星的に支配する人種の類型論と技術のうちで、人間の主観性が絶対的となる」(H90, 67)のであって、ここにヒトラーの正体があばかれたというべきだろう。こうしてハイデガーはユンガーを形而上学の歴史に位置づけるとともに、彼を批判する。すなわち、「エルンスト・ユンガーの蠱惑と限界は、西洋形而上学にひそむ眩惑と終末である——ちょうど形而上学がニーチェの思考によって刻印されたように」(GA90, 14)。けれどもしかし、「終末は、ただ原初によってのみ、反一駁される」(GA90, 14f.)。

ここで問題となるのは、原初の具体的なイメージである。最初の原初は、アナクシマンドロス、ヘラクレイトス、パルメニデスと、わかりやすい。存在歴史的思索の最も秘教的なところが〈別の原初〉、あるいは「第一の原初にたいして山巔同士の近みにある第二の原初」(GA94, 209)である。しかしながら、これには、ハイデガーにとって宿命というほかない詩人がいた。「ヘルダーリン——原存在歴史的な思索の命運」(GA71, 88)であり、「ヘルダーリンという、まったく別の原初」(GA95, 253)だった。「すでにヘルダーリンの詩作は一切の形而上学の超克である」(GA96, 60)から、「ヘルダーリンこそ最も将来的

な者である」(GA65, 401)。これまで言及したように、『存在と時間』執筆中もハイデガーはヘルダーリンに親炙していた。それからほどなく決定的なことが起こった。「原存在それ自身とその真一理とが究極的な問いにあたいするものにはじめてなった瞬間」(「真理講演」1929/30)、ヘルダーリンの語が……命運となった」(GA71, 89)<sup>41)</sup>。

〈存在の意味への問い〉から〈存在の真理への問い〉へと、前期から後期への最初の一步が踏み出された瞬間、そのときから、「ヘルダーリンの詩作はわれわれにとって一つの宿命である」(GA4, 195)。そして、それが、1933年の政治参加の内的動因、「最高の、本来的な意味における〈政治〉」(GA39, 214)となった。

ここまでハイデガーをヘルダーリンに沈潜させたものは、ヘリングラート版全集をにおいて、ほかにはなかった。夭折したヘリングラートにたくさんの著述があるわけではないが、1915年の講演「ヘルダーリンとドイツ人」に、こうある。ドイツ人を「ゲーテの民族」になぞらえるのは旧世代の通俗的見解だが、「私はわれわれを〈ヘルダーリンの民族〉と名づける。なぜなら、ドイツ的な本質のうちに最も深くひそんでいるのは、民族最内奥の灼熱の核が、その表面にある燃えかすの外殻から無限にへだたった下にあつて、ある秘められたドイツ(geheimes Deutschland)においてのみあらわになるということだから……」。「詩人は予見者である。つまり、自分の時代を超えて眺めやり、未来を告知して呼び出す予見者である」が、散逸ののちに発見されたヘルダーリンの詩は、「秘められたドイツはなおも生きている」という証である、<sup>42)</sup>と。〈秘められたドイツ〉はゲオルゲ派の保守革命的な隠語で、各人各様の意味で語られた。しかし、それをヘルダーリンにむすびつけたのがヘリングラートだった。この語をハイデガーは政治的抵抗の意をひそめつつ用いた。まず、総長職を辞任する直前、後悔の言葉を口にしながら、それでも「われわれは秘められた精神的ドイツの見えざる前線にとどまるだろう」(GA94, 155)と、決意をあらたにした。つぎに1934年夏学期の演習草稿では、「見せかけの現在性」に「秘められたドイツ」が対置されている(GA84.1, 337)。また1934年8月の講演で、ナポレオン支配下のドイツにふれて、「民族のこうした悲惨さの一切のうちに、秘められたドイツはなおも生きていたし、すでに生きていた」(GA16, 290)と、上述のヘリングラートの文章そのものが変奏されている。

ユンガーも「総動員」(1930)のなかで、「秘められたドイツの現実性をわれわれは信ずる」と語っているが、それは「鉄兜の下の忘れえぬ真剣な顔つき」という文脈においてであり<sup>43)</sup>、彼にとっては内的体験としての戦争が決定的だった。ヘルダーリンではなかった。それにたいしてシュミットは、1948年5月18日付の思索日記のなかで、『「ゲーテなき若者たち」』(マックス・コメレル)、それはわれわれにとって具体的には、1910年以来、

ヘルダーリンとともにある若者たち、ということだった。……ノルベルト・フォン・ヘリングラートはシュテファン・ゲオルゲやリルケよりも重要だ<sup>44)</sup>と、述懐している。よもやシュミットとハイデガーがヘリングラートについて話し合ったことがあるとは思えないのだが。しかし晩年のシュミットは、「もしハイデガーがヘルダーリンのかわりにドイブラーに出会っていたとすれば、ハイデガーは最も偉大なドイツの言語哲学者になっていただろうに<sup>45)</sup>と皮肉っている。彼は、若いころ、表現主義詩人ドイブラーに自著を捧げたことがあった。

### おわりに 〈哲学の外部〉としての〈詩〉

〈哲学の有限性〉を思い知らされ〈有限性の哲学〉を構想したハイデガーは、つねに〈哲学の外部〉にさらされていた。彼を最も震撼させた**哲学の外部**こそが、**詩**だった。「思索者は、詩人が先行的に詩作するものを、追思索する」(GA94, 299)のであり、「哲学は、気分の転調されたものとはいえ、偉大なる詩作の残響にすぎない」(GA94, 22)。それゆえハイデガーは「存在の詩作」(GA94, 15)あるいは「詩作する思索」(GA94, 35)を敢行した。「現一存在のために詩作すること——ただそこでのみ、そもそも存在が。存在は詩となり、それゆえ有限的！」(GA94, 15)。というのも「詩作的なことは、宿命にかなったものの諸限界にみずからを接合させる有限なことだ」(GA4, 127)から。この「思索の詩作性格」を、彼は「原存在のトポロジー」(GA97, 201)とも呼び、「原存在のトポロジーが原一初である」(GA97, 202)ことを希求した。

だが、原初が性起するには、若きハイデガーが「死をとおして生へ」の蘇りに着目したように、そこには終末が終末としてなければならぬ。「歴史それ自身がその本質において、原存在に帰属するがゆえに、有限である」(GA94, 293)。周知のように、後期ハイデガーは、〈存在の終末論〉をたびたび説いた<sup>46)</sup>。〈死〉や〈終末〉、より正確に言えば、たんなる存在者の終焉や終局ではない〈存在の有限性〉について考えつづけた彼は、最終的に、「**性起のさなかの(im)脱性起(Enteignis)**」(GA97, 182, 261, 391; GA98, 55, 69, 281; GA99, 62, 85, 113; GA100, 282; GA101, 36, 46, 136, )について省察することになる<sup>47)</sup>。

「性起のさなかで、脱性起が性起する」(GA98, 341)、「性起はみずからを脱性起させる」(GA99, 144)、あるいは端的に「性起は脱性起する」(GA100, 121)。つまり「性起は、脱性起から——脱性起へと、性一起する」(GA101, 154)のであって、このような「脱性起からの性起において、世界が世界する」(GA101, 131)。このとき、ついに「原初が、性起である」(GA101, 9)。

本論文は、新歴史主義的手法によりながら、ハイデガーを当時の保守革命の流れのなかに位置づけようとした。彼は保守革命派の革命論議を熟知したうえで、それ

らの議論を不十分だと考えていた。そう判断した根拠こそ〈原初〉にほかならず、この意味でハイデガーはきわめてラディカルな保守革命論を展開した。そこに本論考は積極的な意味をみとめており、あの困難な時代にあつて、「ナチズムがほとんど予感もしなかつたものの本質において、あの状況に屈しない何らかの可能性が……ひそんでいた」(GA98, 326)と考えたい。しかしながら、メーリングは著書『マルティン・ハイデガーと保守革命』において、正反対の結論に達している。「もし保守革命の根本アプローチが……こんにちなお将来を有しているとしたら、ただトーマス・マンの水準において、彼を範と仰ぐことにおいてのみである。それにたいして、ハイデガー信奉者がおこなうハイデガーの構築は、将来のコンセプトとして独断的で誤っている」<sup>48)</sup>。あの旧世代ブルジョワジーの代表者、現代のゲーテをもって自認していたマン、その彼が説くヒューマニズムが、そんなに哲学的水準が高いのだろうか？ ヒューマニズムに加担するのは、現代の世情を是認しているだけで、どこに将来の革命的な要素があるのか？

こうした問いに、新歴史主義に依拠した本論文は、やはり文学理論の言葉で手短かに答えよう。ハイデガーの思索、とくに後期思想は、その内実からいって、〈緑の文学批評／政治〉あるいは〈エコクリティシズム〉に関係している、と。この理論の概説書を書いたガラードによれば、「ハイデガーの哲学にはエコ評論家への明白な魅力がある」<sup>49)</sup>が、それもそのはずで、この本の中心概念は、汚染、原生自然、終末論、住むこと、動物、大地(地球)である。これらは、ハイデガーの思索の道のなかに、それに類した概念をすべてさがすことができる。近代を根本的に原初から超克／耐忍しようとした彼からすれば、それも当然のことだった。

1949年6月11日、前年にハイデガーの山荘を訪ねたユンガーが、ハイデガーに最初の書簡を送った日付である。二人の案件は、新しい雑誌の刊行にかかわるものだった。けっきょく画餅に帰したが、もし計画が実現していたとしたら、第二次世界大戦後の占領下から西ドイツが誕生したばかりの状況下だったから、保守革命の有力な論客を糾合した雑誌はさぞや耳目を驚かしたことだろう。しかし、ハイデガーは当初から、「公共性の独裁」に「雑誌という使い古された形態」で対抗することには懐疑的だった<sup>50)</sup>。すでにハイデガーは一人ではるかに遠くまで踏破していた。友人の「英雄的リアリズム」にたいしては距離を取るほかになく、その「外部に(außerhalb)」、自分自身の「いたわる思索(schonendes Denken)」があると考えていた(GA98, 359)。「いたわる思索」とは、主観性という近代形而上学の〈外部〉にある思索の呼称である。この「いたわる思索にとって、原存在は原一初である」(GA98, 243)が、原初の忘却のさなかに「回想思索しつつ、人間は、脱性起のいたわりのうちに住んでいる」(GA99, 23)。めぐまれた時代に生きたの

ではないだろうが、思索者の境涯には驚嘆するほかない。

## 注

ハイデガーからの引用は Vittorio Klostermann 社による全集版からのものとし、GA のあとに巻数と頁数を記し、本文中に挿入した。また、術語明示と補足説明と著者強調には、それぞれ 〈 〉 と [ ] と太字を用いた。

- 1) 〈有限性〉を中心にすえてハイデガーの思索の全道程を追跡したもののとして、つぎの拙著を参照されたい。稲田知己、『存在の問いと有限性——ハイデッガー哲学のトポロギー的究明』、晃洋書房、2006年。
- 2) Armin Mohler/Karlheinz Weissmann, *Die Konservative Revolution in Deutschland 1918-1932*, 6., völlig überarbeitete und erweiterte Auflage, Ares Verlag 2005, S.92. ユンガーの秘書をしていたこともあるアルミン・モーラーの上掲書は、保守革命の研究にとつての基本文献である。
- 3) Rolf Peter Sieferle, Werkausgabe Bd.3, *Die Konservative Revolution. Fünf biographische Skizzen*, Landtverlag 2019, S.28. ヴァイマル共和国の政治状況は、伝統的な「右」と「左」の概念だけではとらえられず、第三極として「保守革命」を考慮する必要がある(S.29)。
- 4) つねにジンテーゼをもとめるマンの立場からすれば、「保守革命」とは「政治的に表現するなら、保守主義と革命とのジンテーゼ」である。Thomas Mann, *Gesammelte Werke in dreizehn Bänden*, Bd. X, Fischer 1974, S.598. フランスなどの西欧と共産主義ソ連とのあいだにある中欧ドイツの独自路線として「プロイセン的社會主義」(シュペンングラー)を説いたりするのは、保守革命に特徴的な議論だった。「ドイツ的社會主義をマルクスから解放しなければならぬ。……われわれドイツ人は社會主義者である」。「労働者にとつては、ただプロイセン的社會主義があるだけか、さもなければ無である」。Oswald Spengler, *Politische Schriften*, Hofenberg Sonderausgabe (Erstdruck: Beck 1932), S.13, 98.  
ハイデガーの政治問題をあつかった論文でよく引用される、「われわれは万力のなかにいる」(GA40, 41)というハイデガーのドイツ理解は、それゆえ保守革命の議論の線にそうものである。なお、シュペンングラーの『西洋の没落』について、ハイデガーは1920年に講演をおこなったが、その原稿は彼自身の手で破棄された(GA80.1, 533, 558)。
- 5) Hugo von Hofmannsthal, *Gesammelte Werke in Einzelausgaben*, Prosa IV, Fischer 1955, S.413. ハイデガーがこの有名な文章を知らないはずはなく、たんに反動的なそれへの批判的論評は、GA69, 23を参照されたい。
- 6) Louis A. Montrose, *Professing the Renaissance: The Poetics and Politics of Culture*, in: *The New Historism*, edited by H. Aram Veveser, Routledge 1989, p.20.
- 7) Stephen Greenblatt, *Learning to Curse*, Routledge Classics 2007, p.244.
- 8) Martin Heidegger, *Per mortem ad vitam* (Gedanken über Jörgensens „Lebenslüge und Lebenswahrheit“), in: *Der Akademiker*, Nr.5(März 1910),

S.73.

- 9) 三木清、「ハイデッガー教授の思い出」、三木清全集第17巻、岩波書店、1985年、275頁。
- 10) フライブルクには、ドイツ人種学の大家オイゲン・フィッシャー(のちのナチ時代のベルリン大学総長)とハンス・F・K・ギュンターがいた。Stefan Breuer, *Die Nordische Bewegung in der Weimarer Republik*, Harrassowitz 2018, S.49-97.
- 11) Armin Mohler/Karlheinz Weissmann, a.a.O., S.423.
- 12) Martin Heidegger/Karl Löwith, *Briefwechsel 1919-1973*, Alber 2017, S.137f.  
この関連で、ハイデガーの反ユダヤ主義疑惑についてふれておこう。これを最初に問題視し、キリスト教的でも生物学的でも人種的でもない「存在歴史的な反ユダヤ主義」という表現を創作したペーター・トラヴニーには、いまや売名行為まがいの嫌疑がかかっている。Friedrich-Wilhelm von Herrmann/Francesco Alfieri, *Martin Heidegger. Die Wahrheit über die Schwarzen Hefte*, Duncker & Humblot 2017, S.28-33.  
またマルクス・ガブリエルが、ハイデガー全集編集者トラヴニーも加担する「ハイデガーの思索の不幸な神秘化」を問題視し、それが「こうした神秘化とすでに長きにわたって結びついていたスキャンダル産業の枠内でさらに駆り立てられている」と批判するのも、首肯できることである。Markus Gabriel, *Was heißt „denken“? Heidegger und das Problem der Philosophie in den Überlegungen II-XI*, in: *Heideggers „Schwarze Hefte“ im Kontext*, David Espinet, Günter Figal, Tobias Keiling und Nikola Mirkovic (Hg.), Mohr Siebeck 2018, S.178.  
100巻を超える規模のハイデガー全集のわずか10数カ所の文言をめぐって、世界的にマスコミであれほど騒がれた「ハイデガーの反ユダヤ主義疑惑」問題だったが、いま結論としていえるのは、あれはハイデガー本人のスキャンダルでもなんでもなく、ハイデガー研究者のスキャンダルだった、というものであろう。
- 13) Karl Löwith, *Besprechung des Buches Rasse und Seele von Ludwig Ferdinand Clauss*, in: *Sämtliche Schriften I/ Mensch und Menschenwelt*, Metzler 1981, S.198-208.
- 14) ハイデガーとゲオルグ派との関係の詳細については、つぎの拙論を参照。稲田知己、「ヘルダーリンは蘇るか——ヘリングラート、ベンヤミン、そしてハイデッガー」、日独文化研究所『文明と哲学』第10号、こぶし書房、2018年、172-194頁。なお、ヘリングラートの元婚約者からハイデガーに贈られた彼の遺品2品——いずれもヘルダーリン関連の自筆稿——は、マールバッハにあるドイツ文学文書館で閲覧することができる。
- 15) Martin Heidegger/Imma von Bodmershof: *Briefwechsel 1959-1976*, Bruno Pieger (Hg.), Klett-Cotta 2000, S.132f.
- 16) »Mein liebes Seelchen!« *Briefe Martin Heideggers an seine Frau Elfride 1915-1970*, Gertrud Heidegger (Hg.), Deutsche Verlags-Anstalt 2005, S.77.
- 17) Hannah Arendt/Martin Heidegger: *Briefe 1925-1975*, 3. Aufl., Klostermann 2002, S.20, 48.
- 18) Norbert von Hellingshagen: *Vorrede zu Band IV*, in: *Hölderlin-Vermächtnis*, 2. Aufl., Ludwig von Pigenot(Hg.), Bruckmann (München) 1944, S.104.
- 19) ラインハルト・メーリング、「1933年9月ベルリンのマルティン・



- ハイデガーとカール・シュミット』、『思想』、岩波書店、2013年9月 No. 1073、7-18頁。
- 20) シュミットは第二次世界大戦後でさえ、「まさに同化したユダヤ人こそ真の敵である」と日記に記した。これは、改宗を認めないのだから、ナチの生物学的一人種的反ユダヤ主義と同断であろう。Carl Schmitt, *Glossarium, erweiterte, berichtigte und kommentierte Neuauflage*, Duncker & Humblot 2015, S.14.
- 21) Rudolf Bultmann/Martin Heidegger, *Briefwechsel 1925-1975*, Vittorio Klostermann/Mohr Siebeck 2009, S.190f. ハイデガーはタート派が「根源的な古代」と「のちのキリスト生誕以前のローマ文化」を取り違えていることを批判している。Martin Heidegger/Elisabeth Blochmann, *Briefwechsel 1918-1969*, Marbach am Neckar 1990, S.55.
- さらに注記しておくなら、タート誌は立場の異なるジークフリート・クラカウアーも「中間層の反乱」として注目するところだったが、その編集者ツェラーは、ヒトラーが政権を掌握するやいなや、ジャーナリズムから身を引いた。Siegfried Kracauer, *Aufbruch der Mittelschichten/ Eine Auseinandersetzung mit dem »Tat«-Kreis*(1931), in: *Werke*, Bd.5.3, Suhrkamp 2011, S.716-738.
- 22) *Ausgewählte Briefe von Martin und Fritz Heidegger*, in: *Heidegger und der Antisemitismus*, Walter Homolka/Arnulf Heidegger (Hg.), Herder 2016, S.22. 最新資料から、ハイデガーがナチスに期待をいただいていたのは1930年から34年まで、といえる。「まったく〈形而上学的に〉(つまりは原存在歴史的に) 思索しつつ、私は1930—1934年のあいだ、ナチズムを別の原初への移行の可能性とみなしていたし、こうした解釈をナチズムにほどこしていた」(GA95, 408)。
- 23) Martin Heidegger, „Über Wesen und Begriff von Natur, Geschichte und Staat.“ Übung aus dem Wintersemester 1933/34, in: *Heidegger und der Nationalsozialismus I Dokumente*, Heidegger-Jahrbuch 4, Alber 2009. 以下、上掲書からの引用ページは本文中に挿入する。
- 24) Schmitt, *Der Begriff des Politischen*, Synoptische Darstellung der Texte, Duncker & Humblot 2018, S.77, 79. この書は、1927、1932、1933年版で、テキストに大きな異同がある。引用は1933年版から。
- 25) Schmitt, *Die geistesgeschichtliche Lage des heutigen Parlamentarismus*, Zehnte Auflage, Duncker & Humblot 2017, S.35. こうした独裁の理論を、のちのハイデガーは認めない。むしろ独裁を否定するために、過激な一神教批判を展開する。「全体主義的な独裁の現代的な諸体系は、ユダヤの一キリスト教的な一神教に由来する」(GA97, 438)。この観点からすれば、ナチスとユダヤは同根であり、「形而上学的意味における〈ユダヤ的なもの〉」(GA97, 20)という表現は、じつはナチの言葉でナチを揶揄したもの。
- 26) 同時期の1934年夏学期講義『言葉の本質への問いとしての論理学』においても、「歴史的存在の自由という気遣い」にもとづいて「国家の力に権限をあたえること」が把握されている(GA38, 164; GA38A, 163)。この点は、聴講者の講義ノートから編纂された上記講義録の旧版(GA38)においても、新発見の自筆草稿から編集された新版(GA38A)においても、変更はない。思うに、1934年のこの段階では、「自由という気遣い」について、まだ学生相手に語ることができたのだ。それは、ナチの画一的な思想統制が徹底化される直前の、束の間のことにすぎなかったのだが……。
- 27) この図を、『哲学への寄与論考』の類似図と比較してみよう。そこでは、世界と大地、神々と人間の四者から〈現(Da)〉が描かれている(GA65, 310)。「民族」が「人間」(単数形)となっているのが興味深い。これらの図が、後期ハイデガーの世界概念〈四方界〉の原型であることは、論をまたない。講演「物」(1949)では、〈四方界〉としての〈世界〉は、大地(Erde)と天空(Himmel)、神的な者たち(die Göttlichen)と死すべき者たち(die Sterblichen)の四者からなっている(GA79, 17ff.)。ハイデガーは〈四方界〉を図にも描いているが、その形成途上のもはGA99, 31, 108, 157を参照されたい。その最も詳細な最終形態とみなしうるものとして、「世界—遊動—四方界」(GA101, 110)の図を見られたい。
- 28) Ernst Jünger, *Revolution und Idee*(1923), in: *Politische Publizistik 1919-1933*, Klett-Cotta 2001, S.36.
- 29) Jünger, *Der neue Nationalismus*(1927), in: *Politische Publizistik 1919-1933*, S.285.
- 30) Jünger, *Der neue Nationalismus*, a.a.O., S.286.
- 31) Jünger, »Nationalismus« und Nationalismus(1929), in: *Politische Publizistik 1919-1933*, S.504.
- 32) Jünger, *Nationalismus und Nationalsozialismus*(1927), in: *Politische Publizistik 1919-1933*, S.319.
- 33) Jünger, *Nationalismus und Nationalsozialismus*, a.a.O., S.317.
- 34) Jünger, *Krieg und Krieger: Vorwort*(1930), in: *Politische Publizistik 1919-1933*, S.557.
- 35) Jünger, *Der Arbeiter*, in: *Sämtliche Werke Bd.8*, Klett-Cotta 2000, S.13.
- 36) Jünger, *Der Arbeiter*, a.a.O., S.250.
- 37) Jünger, *Der Arbeiter*, a.a.O., S.316.
- 38) Jünger, *Die Technik und ihre Zuordnung*(1933), in: *Politische Publizistik 1919-1933*, S.640f.
- 39) Jünger, *Der Arbeiter*, a.a.O., S.160.
- 40) Jünger, *Der Arbeiter*, a.a.O., S.84.
- 41) 弟フリッツに宛てた1945年6月28日付書簡によると、かけがえのない「ヘルダーリンとの出会い」を「1930年」のこととしている。Ausgewählte Briefe von Martin und Fritz Heidegger, a.a.O., S.125.
- この1930年という年を銘記しておこう。ハイデガーの思想展開にとって、きわめて重要な時機である。ちょうど『存在と時間』から『哲学への寄与論考』へと向かう途上にあたり、通常の解釈では、前者の哲学構想の破綻ないし挫折から後者の生成が説明されることが多い。けれども、ヘルダーリンとの出会いがハイデガーの生涯を決定的に刻印したことを考慮するなら、『哲学への寄与論考』は、ハイデガーが理解するところのヘルダーリンを自分の哲学に取り入れるための、むしろ積極的な、『存在と時間』の再編成の試みではなかっただろうか。ちなみに『哲学への寄与論考』の中心テーゼの一つは、「哲学の歴史的規定は、ヘルダーリンの言葉に聞く耳をもつという、この必然性を認識するさいに頂点に達する」(GA65, 422)ということだった。
- また、このときの出会いは、1933年のいささか唐突なハイデガーの政治的出撃についても、その内的動機をあきらかにしてくれる。よくいわれるような、政治の世界で失敗したから詩へ逃避した、ということではけっしてなかった。あの困難な時代状況のなかで、思想的にも政治的にも、ハイデガーは首尾一貫していたように思われる。

- 42) Hellingrath, Hölderlin und die Deutschen, in: *Hölderlin-Vermächtnis*, S.120, 134, 144.
- 43) Jünger, Die Totale Mobilmachung, in: *Politische Publizistik 1919-1933*, S.579. ハイデガーが引用したことのあるこのエッセイは、ユンガー全集にも収録されているが、大幅に改訂されているので、上掲書から引用する。
- 44) Schmitt, *Glossarium*, S.115.
- 45) Reinhard Mehring, *Carl Schmitt- Aufstieg und Fall*, C.H.Beck 2009, S.50.
- 46) たとえば、以下の箇所を参照。GA5, 327; GA73.2, 1174ff., 1182, 1193; GA97, 244, 271, 283f., 288, 290, 293, 302f., 331, 335, 372, 391f., 408ff., 424; GA99, 63, 79, 84, 134.
- 47) 〈性起〉はいうまでもなく、『哲学への寄与論考』以降の、後期ハイデガーの根本語である。Ereignis の訳語の選定は研究者を悩ませるが、「性起」は有力とされている定訳である。かつて筆者は、「原初の生起」が Ereignis の最重要の語義と考えて、「原生起」と訳したことがある。そして、後期ハイデガーの〈性起〉思想の、いわばその奥の院ともいうべきところに鎮座しているのが、〈脱性起〉という思索語である。「性起の、存在の、四方界の有限性」(GA14, 64) について考えつづけた最後期あるいは晩期ハイデガーは、「性起そのものに脱性起が所属する」(GA14, 28)とのべるにいたった。
- この〈脱性起〉の概念形成について注記するなら、それはまず、とくに「脱性起すること(Enteignung)」という形で、形而上学の存在忘却に関連した〈性起〉の否定的側面を示す術語として用いられた(はじめた(GA66, 311f., 319, 364; GA69, 110, 119; GA70, 122; GA71, 90, 132, 164ff.)). それから、およそ第二次世界大戦後の「黒表紙のノート」の頃から、原初のかつ本来的な世界としての〈四方界
- 思想の成熟とともに、〈脱性起〉は〈性起〉と相即する事態として、死すべき者としての人間がもともと所属している親密なものとして、肯定的といってもいいくらい、深く把握されることになる。本論文では、ふつうは「性起における脱性起」と訳すところを、意図的に「性起のさなかの脱性起」とした。このほかに、「脱性起としての性起」(GA97, 168, 173, 291; GA100, 275; GA101, 49, 54, 56, 70, 73, 136.161)、「脱性起の性起」(GA98, 133, 240, 243, 273f., 287, 293, 301, 303, 364; GA99, 172; GA101, 69, 75, 131, 133, 142ff., 147f.)、「性起の脱性起」(GA99, 133; GA101, 31, 133)といった言い回しもある。
- 48) Mehring, *Martin Heidegger und die »konservative Revolution«*, Alber 2018, S.230. メーリングは著名なシュミット研究者である。「ユダヤ精神と反ユダヤ主義について語ることなしに、ユンガーとハイデガーの著作なら、そのコンセプトにかかわる意匠において再構成することができる。が、シュミットにおいては、それは可能ではない」(S.166)とあるのは、史学的に正しい判断だろう。しかしメーリングは、ハイデガー哲学の本領を理解しているとはいえない。
- 49) Greg Garrard, *Ecocriticism*, Routledge 2012, p.35.
- 50) Ernst Jünger/Martin Heidegger: *Briefe 1949-1975*, Günter Figal (Hg.), Klett-Cotta/Vittorio Klostermann 2008, S.12. 計画されていた雑誌には、「寄稿者として、エルンスト・ユンガー、ゲアハルト・ネーベル[ユンガー派の著述家]、フリードリヒ・ゲオルク・ユンガー[エルンストの弟]、マルティン・ハイデガー、それとヴェルナー・ハイゼンベルク[物理学者]がいた。編集はアルミン・モーラー[注2参照]が引き受ける手はずだった」(S.246).